

流星会議に参加して

長 沢 工*

1. はじめに

今年の8月7日から8日にかけて松本市にある長野県立松本青年の家で、第17回流星会議が開催され、筆者もそれに出席した。規模の小さい集まりであるとはいえ、全国から集まった参加者は100名を越える盛況で、会場の青年の家には宿泊しきれず、近くの公民館に宿泊するものも出るというありさまであった。聞くとところによると、申込みの人数が当初の予定を大きく上まわったため、かなりの人に参加を辞退してもらった止むなきに至ったことである。

会議では、初心者に対する流星観測指導、研究発表、分科会、講演などが盛りだくさんに行なわれたほか、自由時間となった深夜まで情報交換や勉強などがあちこちで見られ、各人が流星についての認識を深めたものと思われた。この流星会議については御存知のない方も多いと思われるので、その概略を報告すると共に、最近のアマチュアの流星観測、研究活動についても簡単に述べてみたいと思う。

2. 流星会議とは

ここでまず流星会議について少し説明しておこう。この会議は我が国で最大の流星観測者の組織である、日本流星研究会の主催によって、毎年8月頃に開かれるもので、今年はその第17回に当たる。しかし会議への参加資格は日本流星研究会の会員に限られることはなく、流星に関心をもつものなら誰でも参加できる。そこでは、アマチュア流星研究者による最近の研究が発表されるほか、観測者間で各自の観測の方法やその成果などについても情報が交換され、日常は連絡の不十分な遠隔地のグループと話し合いができたり、共同観測についての計画が立てられたりして、この会議は流星を観測し研究するアマチュアにとっては欠かすことのできない会合となっている。参加人数も次第に増しているようで、最近5年ほどで倍増したような感じさえあり、アマチュア底辺の最近の充実ぶりがうかがえる。

3. 今回の流星会議から

今回の会議のうちから、ここでは、そのハイライトともいべき研究発表の2、3を紹介してみよう。

竹内雄幸氏は昨年11月に観測した大火球について発表された。この火球は4連カメラの内の3台で撮影できたということであるが、示された写真は流星経路に沿



第17回流星会議記念写真

てフィルムのおよそ半分が感光してしまっている凄いのであり、「こんな火球の出ることもあるのだなあ」と、ため息のようなものが会場にもれていた。説明によると、北西から南東にかけて9 km/秒ぐらいの速さで通過し、発光継続時間は16秒に達するものであったという。

杉本智氏は流星の永続痕写真の解析と、その他の流星の実経路計算から、流星の急激な光度変化と高層大気との関係を追求した研究を発表された。これは大学卒業論文の要約だということ、よくまとまった高度の内容をもつものであった。また鈴木文二氏は自分で撮影した流星スペクトルの解析について述べられたが、これは高級な設備を利用することなく、自分なりの方法で一応の結果を示したもので、その意欲は高く評価されるものであった。

流星会議では、毎回参加者全員による流星の実際観測を予定している。しかし天候に恵まれることはそう多くない。今回は実施可能と思われたのであったが、直前になって急に雲が全天をおおい、やはり中止の止むなきに至ったのは残念なことであった。

4. まとめ

ここで、会議全体を通して感じた、最近のアマチュアの流星観測者、研究者の傾向を筆者なりにまとめてみよう。

眼視観測はいい変わらず盛んであるが、単に観測し記録するという従来の方法に行き詰りを感じる人もでてきたようである。問題点は主として観測精度のことや個人誤差のことにあるらしい。この点の反省から、熟練した観測者の共同観測を比較するという意欲的な試みを岡雅行氏のグループがはじめていた。写真観測も非常に多数の点で実施され、同一流星を捕える確率が格段に向上しているが、連絡網が不十分のため相互に気付かずに終るケ

* 東大地震研究所 K. Nagasawa

ースが多いようで、ネットワーク確立の必要性が痛感された。火球を恒常観測する重要性は多くの人が認めているものの、実現までにはあと一歩の努力が必要のようである。

物理観測に興味をもつ人も目立って増えて、流星スペクトル、色指数、光度変化といった問題にかなりの人が興味を寄せていた。FM電波を利用して行なう流星の電波観測は日本で考案されたものであるが、これによって観測を志す人も多い。今回も木下正雄氏が昼間流星群検出の試みを発表しておられた。これはたいへん興味深いものであるが、あえて私見を述べさせてもらうなら、観測されたエコーと現実の流星との同定にもう少しの努力がほしいと思われる。一方、個人的な話合いで聞いたところでは、テレビカメラを使用して流星観測のテストをはじめている人もあり、感度の点でまだ問題が多いらしいが、流星観測の客観データを得る上で大きな意味をもつ試みであると思われた。

5. おわりに

日本における流星の観測、研究は、その大部分がアマ

チュアによって行なわれている。そのアマチュアの仕事も最近では相当に高いレベルのものになってきている。それは日本流星研究会を中心とする、根気のよい普及活動によるところが大きい。程度の高い研究も重要であるが、それを生み出すためには、初心者に対して親切な指導を欠かすことなく、十分な配慮をすることが必要である。今回の流星会議にも、「空に星があることを知っていれば参加資格がある。といわれたのでやってきた」という発言があった。筆者はこの流星会議を、高度の知識をもつ一部の人たちの会議とすることのないよう、初心の人にまで大きく開いた集まりであるよう心から期待したい。その期待は今のところ、かなり満たされているように感じた今回の会議であった。

最後に今回の流星会議のマネージメントされて順調に会を運営された、信濃天文台の永井績氏に心から感謝を申し上げると共に、種々の便宜をはかっていただいた日本流星研究会の村上忠敬氏・藪保男氏、その他の方々に厚く御礼を申し上げて、いささかヤブニラミ的な筆者の流星会議の報告を終ることにしよう。

書 評

めたせこいや——池田徹郎随想集——

池田徹郎 著

(池田徹郎随想集刊行会、246頁、2,000円)

著者は昭和38年5月に退職された緯度観測所長で、今年の5月に満82才を越えられ、緯度観測所に近い自宅で自適の毎日をすごしておられる。随想集は第一部花・鳥、第二部風・月、第三部伊辺雑想から成っている。随想の大部分は、岩手日報の「番茶煎茶」欄に発表されたもので、時期は昭和23年から最近の昭和46年にわたっており、第三部になると天文月報に掲載された山崎正光、橋元昌矣、山本一清、服部忠彦、平三郎諸氏の追悼文もすべて再録されている。表紙の裏側に著者による旧本館および創立当初の建物のスケッチが展開されて、読者に懐旧の情をかきたてる。第一部に「メタセコイヤ」という随想があり、この珍らしい遺存木の長命とたくましさにあやかって、書名がきめられた。著者はこの樹を観測所の構内の一隅に植え、将来遠方からも見えるようにと願われた。昭和31年に正門から入ってすぐ図書館のわきに植えられたメタセコイヤは現在10米あまりの高さに達している。「観測所を訪れる訪問者」という項目では、四季を通じて訪れてくる可愛らしい野鳥の動作が実に楽しく描かれている。著者は、「私にとって印象深い鳥はクヒナである。外套なしで観測の出来る頃が天文学者にとっては一年中で最良の季節だが、その頃になるとクヒナが決って訪れてくるのである。天頂儀室を取巻く堀に来て、終夜静にカー、カーとゆっくり鳴く」と観測者とクヒナの深い隣組の間柄をさりげなく述べている。私も観測中に聞えてくるクヒナの鳴声をしばしば俳句に織り込んだことがある。

第二部のなかに、「ハレー彗星」、「水星観望の好機」、「水晶時計」などの天文に関する項目が含まれている。子供さん向けの「月のふしぎ」、「続月のふしぎ」も楽しい天文物語である。

第三部では、最初木村栄初代所長に関する3項目が、直接教えを受けた残り少ないお弟子さんとしての著者ならではの珠玉の随筆となっている。殊に川崎俊一技師(後に二代目所長)が長男愛作さんをもうけた時の記念に木村先生から頂いた書が「愛作乳呑」とアイザック・ニュートンかけたウイットはほほえましい。次に観測所の生みの親ともいべき田中館愛橘先生を想う3項目も貴重な随筆である。「緯度観測六十年の苦楽」には厳冬と真夏の時の観測中の苦労が実感をもってえがかれている。第二次大戦中も緯度観測を1日も休まず継続した最高責任者としての著者の体験が、「緯度観測に四十年」のなかに短く述べられている。

緯度観測所に41年間の長期にわたって勤続された著者が、観測と研究の合間に、花鳥風月を愛し、人と人との交流を大切に保ち、おのずから風格を形成されたことは、後輩である私達の学ぶべきことである。著者の愛弟子である岩手大学名誉教授石川栄助氏が随想刊行の首領をとり、固辞された著者に叱られながらも遂に刊行にこぎつけたことを特に記し、緯度観測所にゆかりをもつ方々にぜひ一読をおすすめしたい。最後に、刊行後著者が指摘された正誤表にまつわるエピソードを紹介する。「観測所の動物」の初めの一節、「当所創立の当時はここへよくキツネが出たそうだ。北方1キロの日高神社のキツネとが、互に訪問し合う途中観測所に立寄ったものだ」という文中で、「日高神社のキツネと南方2キロの須江稲荷のキツネとが」と補筆された。これには私も笑をこらえるのに一苦労した。まことにほほえましい北と南のキツネのランデブーである。(須川 力)